やまなみ

VOL. 14
2017年5月17日発行

同窓会
横浜国立大学教育学部
附属横浜中学校　同窓会
〒232-0061
横浜市南区大岡２－31－３
☎ 045－742－2281
ホームページ
http://www.fuchu.sakura.ne.jp

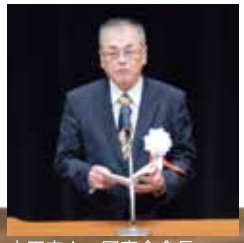
CONTENTS

p1　創立 70 周年記念式典
p2　同窓会会長挨拶　附属横浜中学校同窓会　会長　吉田守人
p3　校長挨拶　横浜国立大学教育学部附属横浜中学校　校長　中嶋俊夫
p4-5　オアシスめざして　学校司書　加瀬由加
p6-7　記念式典・祝賀会／同窓会歴史年表
p8-9　河地先生、治田先生の思い出　第 15 期生　伊東通
p10　創立 70 周年寄稿　第 19 期生　関水康司
p11　光陵高校校長挨拶　光陵高校　校長　小田貞宏
p12　創立 70 周年記念贈呈品

創立70周年記念式典

鈴木啓靖　実行委員長

中嶋俊夫　校長


吉田守人　同窓会会長

石村重雄　PTA 会長

小野康男
横浜国立大学副学長

折笠初雄
県教育委員会教育局指導部長

小田貞宏
県立光陵高等学校校長

塘優那　生徒会会長

「附属の歴史を顧みて」

横浜国立大学教育学部
附属横浜中学校同窓会　会長　吉田　守人
（二十期）

平成二十八年九月十六日に横浜国大附属横浜中学校創立七十周年記念式典が催されました。この「やまなみ十四号」ではそのときの模様や附属中学校の歴史を年表にしましたのでご覧ください。

同窓会は現在、第六十七期生が卒業して約八三〇〇名で組織されています。

そもそも同窓会は、第一期生の新井先輩、二期生の野崎先輩、四期生の広瀬先輩たちと、去年お亡くなりになられた元副校長の河地安彦先生が尽力して作られたものです。詳しいことは「やまなみ十三号」の新井康友先輩の記事を読んで頂くと分かると思います。

附属横浜中学校は、現在「FY」と称して親しみをこめて呼ばれています。昔は単に「附属」と呼ばれていました。昭和二十二年五月に「神奈川師範学校女子部の附属中学校」として設立されてから今日に至っています。

この十年を振り返ってみますと、同窓会長は中西前会長が二年間、高木元校長のもと活動しました。わたしが会長職を務めてから八年経ちますが、蝶間林元校長（やまなみ十二号）、加藤前校長（やまなみ十三号）、中嶋現校長先生にたいへんよくして頂き、同窓会を後援会やPTAと同等に扱って頂き大変感謝しています。

同窓会ではこの創立七十周年記念にあたり、裏表紙に示すように、教室に備えられる掲示板、図書室の書棚とソファー、運動場で使われる大型テントと朝礼台を寄贈しました。同窓会の文字が在校生の皆さんや父兄の方々の目にとまり、PR活動に大いに役立つと確信しております。

同窓会は現在若い人たちを中心に活動をしています。平成二十八年九月十六日付けの神奈川新聞に附属横浜中学校の記事が掲載されました。その中で若い有能な方たちが多方面にわたり活躍していることがお分かりになると思います。

また記念式典当日の司会をされていた渡邉あゆみさん（第二十六期）や記念演奏をして下さった加納伊都さん（第四十九期）も本校の卒業生です。

卒業生の話といえば、今回の座談会にはどのような方々にお願いしたらいいのかという問題が出ていました。去年八月に逝去された本校元副校長の河地安彦氏に相談したところ、多くの著名人がいることを教えて頂きました。河地先生には同窓会創立から長年にわたっていろいろとご指導を賜ってきていました。

河地先生からの手紙には、次の八名の先輩の名前が記されていました。

（順番は手紙の記載通り）

① 千葉景子（第十五期）
元法務大臣

② 紀田純一郎（第二期）
作家・評論家

③ 波木井賢（第二十一期）
ビオラ奏者

④ 桜井由躬雄（ゆみお）
（第十二期）
東大名誉教授（歴史学者）
ベトナム国家大学名誉博士号授与
平成二十四年十二月十七日死去
（六十七歳）

⑤ 白井浩子（第十期）
岡山大学準教授（生物学）
第十四回猿橋賞受賞（女性科学者として最高）

⑥ 関水康司（第十九期）
国際海事機関（IMO）第八代事務局長（日本人二人目）

⑦ 霞富士雄（第七期）
順天堂医院乳腺センター長
日本乳癌学会名誉会長

この「やまなみ十四号」では、国際的に活躍されている関水康司氏に寄稿して頂き大変感謝しています。

座談会の話に戻りますが、今回は若い方たちにお願いすることになりました。同窓会には毎月一回、幹事会を開いています。そこで幹事の方たちに集まってもらい座談会を開こうということになりました。四十二期生の高田君、四十四期生の石川君、四十八期生の山口さん、五十七期生の小西君、そして司会進行役には五十二期生の鬼頭君にお願いして開催しました。平成二十八年九月十六日の神奈川新聞に一面広告の形で発刊されました。平成二十九年の総会で、この新聞記事を希望する方にお配りしますので楽しみにしていてください。また創立七十周年記念誌にも座談会のことが掲載されました。見事な出来栄えに六期生の小松先輩（神奈川新聞社）に感謝しています。

附属横浜中学校は創立七十周年を迎えて、同窓会はこれからも地道に活動を続け、未来に向けて発展していかなくてはなりません。未来とは今が入り口であると思います。

今後とも附属横浜中学校と同窓会のために、皆様のご協力を賜りますようお願いいたします。

創立七十周年 Fy魂を受け継いで 未来を切り拓く

横浜国立大学教育学部
附属横浜中学校　校長　中嶋　俊夫

平成二十七年四月に十七代校長として本校に着任し、二年近くが過ぎようとしています。私が横浜国立大学教育人間科学部に赴任してからはもう十六年になりますが、その前は、お茶の水女子大学附属高等学校に音楽科教諭として勤め、同附属中学校の授業も担当していました。中学生や高校生と過ごしながらくたくたに疲れる日々でしたが、振り返ってみると、生徒たちからたくさんのエネルギーをもらっていたと思います。この二年間附属横浜中学校に身を置いて改めて感じることは、学校は一人一人が発揮する力がぶつかったり、重なりあったりしながら、ダイナミックな動きを生み出すところであるということです。こうして結集するエネルギーは、集団と個人の間を往還して両者の成長を促しますが、そのことは本校の体育祭や学芸祭、TOFYでの発表、そして部活動や日々の授業など、学校生活のそれぞれの場で実現しています。その中で私は、一つのことを成し遂げるために力を尽くすFy生たちの姿が好きです。様々な活動で発揮されるFy生の思考力や表現力は、作品や発表、研究成果となって実を結んでいますが、どれもすばらしく、いつも感動させられてばかりいます。

さて、本校は今年度創立七十周年を迎えました。この七十年は、新しい時代の波や風を受けながら、一期生からバトンを受け継ぎ、未来を切り拓くために知の探究をし続けてきた年月です。そのFy魂は今も六十八期、六十九期、七十期の生徒一人一人の中に育まれ、互いに認め合い、高め合い、学び合う姿は今も健在です。そして、そのFy生たちの学ぶ姿を支え、リードし、ミッションと呼ぶにふさわしい教育研究の使命を果たしてきた先生方のたゆまない努力と献身に、改めて感謝する次第です。

この七十周年の記念行事の一環として様々な企画がありました。九月十六日には神奈川県立音楽堂で記念式典を挙行し、先輩諸氏のご参加をいただくとともに、卒業生で、NHKアナウンサーの渡邊あゆみ氏（二十六期）とヴァイオリニストの加納伊都氏（四十九期）から在校生にすてきなプレゼントがありました。渡邊氏からは進路選択の指針になるお話をユーモアたっぷりに、加納氏からはベートーヴェンのスプリング・ソナタ他の名演奏を興味深い解説を交えていただきましたが、どちらも生徒たちの心身の共振を引き起こし、さすが卒業生のなせる技と感心いたしました。また、横浜国立大学教育人間科学部音楽教育講座の私の同僚で、作曲家の島田広准教授に七十周年記念の委嘱作品として本校の校歌をモティーフにした祝典序曲を作曲していただき、吹奏楽部の演奏によりこの式典で披露できたことを光栄に思います。

同じく九月十六日の神奈川新聞紙上で「座談会特集：母校を語る『生きる力を身につける』」と題し、外務省首席事務官の木戸大介ロベルト氏（四十五期）、塘優那生徒会長、曽原剛史同副会長と私の四人で対談し、本校の特色ある教育活動の意義について語りながら、今の中学生たちが活躍する未来を展望しました。他にも高田哲也氏（四十二期）、石川裕一氏（四十四期）、山口千恵氏（四十八期）、鬼頭勇人氏（五十二期）、小西悠理氏（五十七期）の五人卒業生諸氏からの思い出話や在校生へのエールも加わり、本校の教育が積み上げてきた成果をアピールする充実した紙面になったことを、感謝の気持ちとともに特筆しておきます。

このように今年度は多くの卒業生から話を聞く機会がありましたが、その中で話題に上るのは、卒業して何年経っても記憶に残っている、楽しかった思い出や真実に触れたときの感動です。立野と弘明寺、それぞれの校舎で過ごした三年間が、現在の同窓諸氏のご活躍につながっていることは、後輩たちには何よりの励みになります。これを機に、各々のお立場から母校の後輩たちにメッセージを送っていただける機会がさらに増えますよう願っています。

最後になりましたが、本校七十周年記念行事のために吉田守人同窓会長をはじめ、多くの会員の方々がご尽力くださり、また多額の寄贈品をいただきましたことに心から御礼申し上げます。また七十周年記念誌もまもなく完成しますが、Fyを愛し続けてくださる皆様の思いが詰まった素敵なアルバムになりましたことに重ねて感謝申し上げます。どうか会員の皆様には今後とも母校にあたたかいご支援をいただきますようお願いします。

私たちが生きていく未来には、いまから予想もできない世界が待っているとよく言われますが、附属横浜中学校で学んだ同朋には、そのことを恐れず、むしろ困難な状況、未知な状況にあるときこそ、自分に何ができるかという期待感をもって乗り越えていってほしいと願います。これからも内外の連携を強め、子どもたちが学びの道程を確かな足どりで進んで行けますよう、教育活動に取り組んでまいりたいと存じます。

オアシスめざして

学校司書　加瀬　由加

最初に「図書室」は、学校図書館法に基づいた「学校図書館」であることを理解いただきたいと思います。

学校図書館が学校教育において欠くことのできない基礎的な設備であることにかんがみ、その健全な発達を図り、もって学校教育を充実することを目的とする。同法第一条に公的に宣言しています。

学校図書館が学校教育の教育課程の展開を支えるものとして、資料センター及び学習センターとしての機能を発揮できるよう運営全般に関する仕事を行っています。この数年の情報化、国際化などの進展の中で、情報の処理や活用を図るなどの生涯学習に必要な能力や態度の育成についても重要な取り組みと考えます。豊かな心をもちたくましく生きる人間の育成や、社会の変化に主体的に対応できる生徒の育成を図るとともに、個性を活かす教育の充実をはかることを目的とする学校図書館の役割は大きいものです。

しかしながら、生徒一人一人が自ら読書する気持ちにならなければ、読書は成り立たないし、生徒一人一人の読書意欲を導き出さなければ生き生きとした読書活動の展開は望めません。つまり、積極的な読書態度を育て、一人一人のよさを生かす読書指導や利用指導の展開が重要であると考え日々の業務を行っています。

学校司書の仕事内容は、本の選定やレファレンスだけでなく、読書活動、教科学習への支援や環境整備などがあります。

本校図書館の蔵書は学校図書館図書標準をまだ満たしておらず、積極的に蔵書を構築している途中です。よって、資料の選定は最重要課題であり、文学に過度に偏ることのないよう、自然科学や社会科学の分野を高めつつ、本校の総合学習ＴＯＦＹに合わせた資料をそろえるなどニーズに応じた調和のとれた蔵書構成を心がけています。

ＴＯＦＹでのレファレンスは多く、生徒それぞれが自分なりの回答にたどり着くための材料提供を幅広い視点で行うことが求められます。今までの経験を総動員して役に立つよう支援します。

そして、読書活動、読書の世界への働きかけとして夏・冬の特別貸出の企画運用、読書週間に今年はクラス対抗ジグソーパズルキャンペーンを展開し大いに盛り上がりました。まだまだ読書のおもしろさを知らない生徒に、いろいろな機会を作って知らせたいと思います。本校の図書館は北東三階奥という生徒の動線から外れた位置にあります。これは自分で意識しない限り図書館に行く機会はなくなります。廊下に黒板キャンバスを配置したり、扉に「ようこそ」と切り文字を配したりと、季節展示を心がけるなど、生徒に関心を持ってもらえるよう日々努力と工夫を凝らしていますが図書館に足を運ばない生徒への対応が課題です。

今年度は充実した雑誌架の前にブラウジングに適したソファーベンチを同窓会費より購入していただき、図書館の環境も一層充実してきました。明るくわくわくするような、そして静寂の空間の融合を目指します。

本を手にとってもらえるよう工夫を凝らして、生徒が「これおもしろかったよ」と言ってくれよう、そして卒業後に本校の思い出の片隅に図書室が残るよう、附属横浜中のオアシスとなるよう、先生とともに運営努力してまいりたいと思います。

創立70周年記念式典

歴代　同窓会長・校長　一覧

年月日	同窓会長	氏　名	校　長	氏　名	変　遷
1947年　5月			第１代	八島　長寿	神奈川師範学校女子部附属中学校として発足
1949年　4月					本校東側に木造２教室を新築（ＰＴＡ寄贈）
1949年　6月					校名を「横浜国立大学神奈川師範学校横浜附属中学校」に変更
1951年　4月			第２代	宮城　栄昌	校名を「横浜国立大学学芸学部附属横浜中学校」に変更
1952年 11月					普通教室２教室を増築（ＰＴＡ寄贈）
1954年　5月			第３代	原　弘道	
1956年 10月					創立10周年記念事業挙行、校旗・校歌を制定
1960年　5月			第４代	永田　義夫	
1965年　4月			第５代	野村　正七	体育館落成
1966年　4月					校名を「横浜国立大学教育学部附属横浜中学校」に変更
1967年 11月					東側鉄筋コンクリート造新校舎落成
1969年　5月					北東側鉄筋コンクリート造新校舎落成
1971年　4月			第６代	金井　達蔵	
1976年 11月	第１代	新井　康友（1期）			創立30周年記念式典挙行
					附属横浜中学校同窓会設立　※１
1977年　4月			第７代	清水　俊信	
1980年　4月	第２代	野崎　正之（2期）	第８代	細谷　真澄	
1981年　8月					弘明寺校舎に移転
1983年　4月	第３代	広瀬　雄（4期）			
1983年 12月					「若き花々の像」落成式挙行
1986年　4月	第４代	石原　勲（5期）	第９代	片桐　重男	
1989年　4月	第５代	矢島　孝一郎（10期）	第１０代	井関　義久	
1994年　4月			第１１代	泉谷　周三郎	
1997年 10月					校名を「横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校」に変更
1997年 11月					創立50周年記念式典挙行
					同窓会より附属横浜中学校へティンパニーを贈呈
1998年　4月			第１２代	福岡　敏行	
2000年 12月					本館校舎が国の文化財として登録
2001年　4月	第６代	木野　正則（16期）			
2002年　4月	第７代	中西　宏（18期）	第１３代	中村　祐治	
2004年　4月					横浜国立大学が国立大学法人となる
2005年　4月			第１４代	高木　展郎	
2006年 10月					創立60周年記念式典挙行
					同窓会より附属横浜中学校へ会議用テーブル・椅子を贈呈
2009年　4月	第８代	吉田　守人（20期）	第１５代	蝶間林　利男	校服の変更(男女ともブレザー)、県立光陵高等学校との連携開始
2010年　9月					新図書室完成
					同窓会寄贈の書籍を展示
2012年　4月					県立光陵高等学校へ連携枠1期生入学
2012年　5月					スクールカウンセラー、図書室司書配置
2013年　4月			第１６代	加藤　圭司	
2015年　4月			第１７代	中嶋　俊夫	
2016年　9月					創立70周年記念式典挙行
					同窓会より附属横浜中学校へ朝礼台・大型テント・掲示板・書棚等を贈呈
2017年　4月					校名を「横浜国立大学教育学部附属横浜中学校」に変更

※１　1956年より同窓会設立の準備を始め、1976年に同窓会が発足する。

創立70周年記念式典　祝賀会

お二人の思い出

伊東　通（十五期生）

平成二十八年八月二十二日、ちょうど台風がダブルで来襲して、その一つが関東地方に上陸した朝に、河地安彦先生は亡くなられた、とご長男のお嫁さんが教えてくださった。八十七歳であられた。

先生から電話が入っていたことに後から気が付いて連絡をしたところ、お嫁さんが出られて先のことをお伝えいただいた。

「台風が上陸して物凄く荒れている朝に、父は亡くなったのです。そうして台風と一緒に福島の方へ去って行ってしまいました」

福島は先生の故郷であり、別荘もあって、夏の間いつも過ごされていたところである。

まるで先生が車を運転される時の様に、激しく怖いようなすごいスピードで行ってしまわれたということになるだろうか。

もう一つの台風の方は沖縄方面へ逸れたはずが又ぐずぐずと戻ってきて、大きな被害を出したのは記憶に新しい。

一方、河地先生は豪快にダイナミックに、男らしくさっさと彼方へ旅立たれた訳だ。

一見穏やかで優しそうに見えるが、強い意志と倫理観に支えられた厳しさを秘めた先生らしい去り方だと思わざるを得ない。

実際、最後まで生きようとされる意志が強かったとご長男もおっしゃっておられた。

先生の言葉で思い出すのは、附属中での研究会に講師としてお出でいただいた折に、

「カントのように、自らの行動がそのまま倫理の規範となるように行動することが大切だ」

とおっしゃられたことである。その時強く印象付けられたのでよく覚えている。

もっとも、河地先生は、哲学者タイプというより、モラリストではなかったかと思う。フランスのモンテーニュのように、よく現実を見、検討して、妥当性を見出し、粘り強く解決して行く、懐の深いタイプだと感じる。

ある時、先生と話していると

「伊東君は、ヘッセが好きだろう」

と不意にお尋ねになった。そうですとお答えすると、実はご自分もそうなのだとおっしゃられるのだった。

いつだったか入院された折に、カザルス演奏のバッハの無伴奏チェロソナタをお届けしたところ、あまりお好きでないご様子であったので、その次に入院された時には、シフ演奏のモーツアルトのピアノソナタ集にしたところ、これはお気に召したようであった。

いろいろ思い巡らせてみると、先生はカントやモーツアルトやヘッセの明澄性とでも言ったものを好まれたようではあるが、生き方は知恵に裏打ちされた融通無碍なモンテーニュによく似ていると思わざるを得ない。その広い目配りと実行力から言ってもそうだと思う。しかしそうは言っても

「僕は俗っぽいんだ」

とよくおっしゃっておられた先生はご同意されないかもしれないが。

治田成夫先生は、河地先生が亡くなるほぼ一年前の九月始めに亡くなられた。河地先生と同い年なので、八十六歳だったはずだ。

治田先生は亡くなられる前に、奥様に、決して誰にも知らせてはならないと厳しく命じられたそうである。そのために私たち、卒業生も旧附属中の教職員も、暮に喪中はがきがご子息から届くまで、まったく気が付かなかった。

この点は、河地先生も同じで、誰にも知らせないように、ご家族に強くおっしゃったそうである。先生が亡くなられる一年以上前に僕自身も、決して大騒ぎしないよう、知らん顔しているようにと直接電話で告げられたのだった。

恩師お二人の、ご自分の死後についての潔癖さ、毅然とした態度に打たれざるを得ない。

実は、喪中はがきが届く数日前に治田先生の奥様から僕にお電話があった。

「主人から叱られるかもしれないけれど、伊東先生だからお知らせします」

という前置きで、先生の亡くなったことをお伝え頂いた。生前、先生は僕からの手紙が届くと実に楽しそうにお読みになっておられたと奥様はおっしゃった。そういうこともあって、お知らせいただいたようであった。

僕の手紙の内容は近況報告や、先生の最後の二冊のご著書「意識と主体性」、「人間の存在意義」に関する質問などであった。

先生のこの二冊のご著書から、存在は存在自体を超えるという、ヘーゲルの言う弁証法が実に生き生きとしたダイナミックなものであることを、またそれに基づく「創発」というクリエイティブな考えを少しでも理解することができたのは、大きな喜びである。

加えて、死後に我々の存在が無にはならないという論理的証明と、無は存在し得ないという結論は大きな励ましとなった。

先生はカントもヘーゲルも、無論ドイツ語でお読みになっておられたわけだが、

「ヘーゲルは分かるがカントは手強くってね」

とおっしゃるのをうかがったことがある。

また、ラテン語も熱心に学んでおられた。こちらは只々恐れ入るばかりであった。

僕が中学生だった頃、治田先生が何やら外国語の歌を口ずさみながら掲示物を貼っておられるのを目にしたことがある。だいぶ後になって分かったのだが、先生がドイツ語で歌っておられたのはシューベルトの歌曲であった。シューベルトを始めとするドイツ歌曲がお好きなのであった。

先生は長い間、金沢区にお住まいだったが、区内の合唱団に所属されていて、何度も発表会でステージにお立ちになっておられた。歌い終わった後の先生は実にいい笑顔であった。

また、先生の将棋好きは有名で、どれくらいの実力なのか僕などにはわからないが、若松先生ならご存知かもしれない。

よく、幸田露伴が娘の文を唐紙を隔てて座らせては将棋の相手をさせるという無理な注文をしたのは、かわいそうだとおっしゃるのだったが、それはどういう意味であったのだろうか。

僕が附属中に勤めてからの最初の三年間は、治田先生が副校長だった。先生の月に一度の朝礼での訓話は難しいので生徒たちは弱っていたが（教職員もそうだったかもしれない）、後に附属中を退職される時に先生はそれらを含めて「附属中学で語ったこと」という冊子にまとめられて教職員に配られた。落ち着いて読むと確かにいい話なのである。でも難しい。研究紀要に発表された論文を頂いたこともあるが、とてもではないが歯が立たなかった。

先生の最後のご著書の二冊も僕にとって難しいことには変わりはないのであって、しょうがないのでストップウオッチ片手に十分ずつ毎日読むことにした。十分ならどんなに難しくても耐えられるだろうと考えた訳で、こうやって何回も読み直した。

「小林秀雄が、ベルグソンの表現は団子を串刺しにした様に、論理を連ねて行くのだと言っていたが、僕もそうしたいのだがどうも難しくてね」

とは先生のお言葉である。先生が丁寧に順を追いつつ述べられていることを、何度も行ったり来たりしながら読むのはまるで山登りをしているようであった。先生の論理の積み重ねをたどるのは大変であった。

今から七年前（平成二十二年）五月に、お二人とご一緒に沼津の国家公務員の施設に泊まったのは、今となっては良い思い出である。それ以前から、お二人とも、三人で一晩ゆっくり過ごそうという希望を漏らしておられた。

恩師お二人とご一緒ということで、僕は弱っていたのだが、とうとう、沼津なら治田先生が当時お住まいの名古屋からも、横浜からの距離と大して違わないだろう（実は大違いで名古屋からの方がはるかに遠かったのだが）ということで、河地先生が計画を立てられたのである。

この時は、夕食前から、僕がリュックで担いでいったワイン（無論複数本でそのうちの一本は冷やしながら運んだ）を飲みながら、三人で色々なことを夜遅くまで語り合ったのだった。夕食が済んだ時に、係の男性から

「いいお話でしたねえ」

といわれたのは、よっぽど三人で楽しそうに話していたのだろうと思う。

思えば、恩師お二人と教え子という妙なというより、緊張すべき取り合わせのはずであったが、そのようなことは少しもなく、翌日も若山牧水の記念館を訪ねたり、沼津漁港で寿司を食べたり（治田先生はマグロが大好物だとおっしゃられて、いくつも召し上がられた）、干物を買ったり、午後まで三人で愉快に過ごした。

今から思えばなんと貴重な機会であったことか。

このフェアなお二人の先生の生き方、晩年の立派な姿を範として、自身の老年期を意味あるものにしたいと強く思っている。

河地先生、治田先生、有難うございました。

国連への勧誘

国際海事機関名誉事務局長
神戸大学特別顧問
關水　康司（十九期）

▶IMO本部でのスピーチ

二十七年前、政府から国連の専門機関である国際海事機関（IMO）に派遣されて、家内と二人の子供達を連れて英国ロンドンに向け、成田を飛び立つ時は、密かに胸に期する所がありました。それは、この派遣の機会を得て、全力で仕事に取り組み、自分の力を国際社会の中で試してみたい、そして、手応えがあればIMOに残り、自分の職業人生をIMOに賭けてみる道を探ってみたいという事でした。

以来、四半世紀以上に渡りIMOで勤務し、二〇一一年の選挙で事務局長に選出され、二〇一五年末に任期満了して、昨年ようやく帰国しました。今は、自然と歴史溢れる、九州の筑後川近くで引退生活を始め、長く離れた日本の生活を家内共々楽しんでいます。

国連の定年は現在のところ六十五歳ですが、将来は七十才になると思います。ですから、仮に四十才で国連に入り務め始めるとなると、定年までには三十年勤務出来ることになります。広く知られてはいないと思いますが、国連で仕事をする上での大きな魅力のひとつに、手厚い年金があります。国連給与は、国を離れて勤務している時は所得税がかかりませんので、医療保険や教育補助金他の制度を考えれば、働いている間は一人前の給与所得があります。私も退職するまでは、実感できなかったのですが、それに加えて、三十年近く勤務し、最終ポストが部長や事務局次長の様な高位のポストになると、十分な年金も得られます。ただ、これらは報酬です。報酬が働く魅力にはならないでしょう。

国連で働く真の魅力は、自らの国の利益を代表するのではなく、国際社会の利益こそを追求する活動に貢献できる事、国々の利害調整の中で新しい道を提示できる事、より良い社会とは何かをいつも考え、その実現のために、既成の枠を超えた活動ができる事、高い理想と理念を持って仕事ができる事、特定の個人、団体、国家の利益代表にならず、全体の利益を、グローバルな視点から追求できる事などでしょう。

国連で働く国際公務員の仕事は、政治、経済、社会、技術、人権、国際法の諸分野が絡む複雑な現実の社会を活動の舞台として、より良い国際社会を作ることを目的とした創造的な仕事です。活動の舞台は、まさに全世界です。

私も、南極の地を踏み、北極海を航海し、全世界の七十カ国の国々を回りましたし、地球規模の課題に挑戦してきました。写真は、インド洋のソマリア海賊対策の一環で、ジブチのゲレ大統領と地域訓練センター建設の起工式でのものです。

事務局長に選挙された二〇一一年の秋、思いもかけず、河地安彦先生からお祝いと激励のメールを頂きました。卒業以来四十三年ぶりのことです。先生は見ていてくれたんだなあと思いました。先生からその時頂いた言葉は、事務局長として、「あくまで自分が考える正義」の実現に努めよということでした。この言葉は、事務局長として苦渋の決断を迫られる時、いつも私と共にあり、本当に勇気づけられました。

帰国して、まだ先生にご報告もできないうちに、先生の訃報に接しましたのは本当に悔やまれます。同窓会の吉田会長から、先生のご遺志だから、是非やまなみに寄稿してくれと頼まれた時、躊躇しましたが、先生のご恩もあり、同窓生へ次のメッセージを送るために、ご依頼をお受けしました。

国連は機能しているかというのは、いつも問われることです。国連は無力ではないかとも言われます。でも、国連は弱点と課題を抱えつつも、現在そして将来、人類が抱える様々な問題の解決のために、現在考え得る唯一の、国を超えた世界組織でしょう。そして、この組織には、参加して貢献しようという熱意のある方であれば誰でも、国連職員として自ら参画できる道が開かれているのです。性別、人種、国籍を問わず、我々人類のすべての人々に開かれているのです。

附属中の同窓会の方、そして特にこれから社会に出て行こうとする若い世代の方々の中から、一人でも、二人でも、国連を身近な存在として捉え、将来そこに身を投じて人類のより良い社会を作る活動に携わろうとする方が出て頂きたいものだと思います。

関心のある方は、どうぞご連絡ください。私の経験をお伝えできると思います。

▲ジブチ訓練センター起工式の様子

新たな連携に向けて

神奈川県立光陵高等学校
校長　小田　貞宏

一、緩やかな繋がりから強い連携へ

光陵高校と横浜国立大学教育学部附属中学校との連携型中高一貫教育校については、これまでの「中・高・大連携によるこれからの教育実践モデル」の成果を踏まえ、今後は、高大接続をより強化し、グローバル・リーダー育成に向け、中・高一貫教育から中・高・大の十年間を見据えた連携型の教育への新たな展開をめざして取り組みます。

二〇一六年一月、神奈川県教育委員会は「県立高校改革実施計画」を公表しました。質の高い教育の充実、学校経営力の向上、再編・統合等の取組という三本の柱を立て、二〇一六年に始まり三期十二年に及ぶ改革の実施計画です。冒頭の文は、実施計画の中にある附属横浜中学校と光陵高校の「連携型中高一貫教育校」についての説明文です。

皆様ご承知のとおり光陵高校は横浜国立大学の附属高校とすることをめざして創立され、創立期においては、生徒数の八割を附属中学校卒業生が占めたそうです。附属高校への途が閉ざされ県立高校として歩むことになりましたが、その後も緩やかで良好な関係を保ってきました。ですから横浜国立大学教育人間科学部と神奈川県教育委員会によって二〇〇七年に公表された「中・高・大連携によるこれからの教育実践モデルの構築実施計画」は、その後の横浜国立大学および附属横浜中学校と光陵高校の連携を強固なものとする大きな変化の基盤となりました。そして冒頭にあげた二〇一六年一月発出の実施計画では、これまでの附属横浜中学校と光陵高校の連携を成果あるものと見なした上で、「中・高・大の十年間を見据えた連携型の教育」という、さらなる強化に向けた方向性が示されました。

二、連携枠

二〇一一年発行の『やまなみ十二号』において、当時の鈴木俊裕光陵高校校長は「平成二十四年度から、横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校との連携型中高一貫校として、附属中学校の生徒、約四十名を上限として入学して来る予定です。」と記されました。「中・高・大連携によるこれからの教育実践モデルの構築実施計画」に基づき、附属横浜中学校でTOFYと呼ばれ、光陵高校でKUと呼ばれる課題探究としての総合的な学習の時間をその中心に据え、二〇〇九年から「連携型中高一貫教育校」として教育展開をおこない、二〇一二年には附属横浜中学校生徒の光陵高校連携枠入学が始まりました。なお五年間の連携枠入学者は、初年度二六名、次いで二八名、三二名、三八名と推移し、二〇一六年に上限の四十名になりました。

三、光陵高校の教育活動と連携枠への期待

「高校においては、連携する中学校から入学した生徒と他の中学校から入学した生徒が、相互によい影響を与え合う集団による教育展開を行う。」と「中・高・大連携によるこれからの教育実践モデルの構築実施計画」に記載されています。

そこでクラス分けでは、連携枠入学者のみのクラスを構成することはせず、均等にクラス分けをします。連携枠設置の効果として、附属横浜中学校からの生徒については、「中学校で身に付けた確かな学力のさらなる伸長」という学習の継続性が、他の中学校からの生徒については「希望する進路の実現につながる充実した教育内容の享受」があげられています。さすがにTOFYを経験した附属横浜中学校からの生徒のKUにおける優位性は明らかです。一方で、学力検査による入試の準備に努め挑んできた一般枠生徒の学力の高さに、連携枠生徒は驚きを隠せずにいるようです。しかし光陵生の世界は多様さを認め合う世界であり、生徒は、自らの持っているもの、得意としていることを互いに提供し合い、互いを高め合っています。

TOFYの経験があるからこそKUでは新たなテーマ、新たな方法に挑戦して欲しいと考えます。KUだけではなく高校生活のあらゆる場面で、自由闊達に思考し、表現する柔軟さや強さを身に付け、高い進学意思の実現に向かって挑戦する気概を連携枠生にさらに求めます。社会の急激な変化が取り沙汰され、グローバル化と言えば何でも説明できるように思われる時代だからこそ、翻って足許をしっかりとみつめ、心やさしき社会のリーダーをめざしてほしいと期待します。

創立70周年記念贈呈品

▲図書室　書架

▲運動場で使用するテント

▲教室掲示板

▲朝礼台

▲図書室　ソファー